

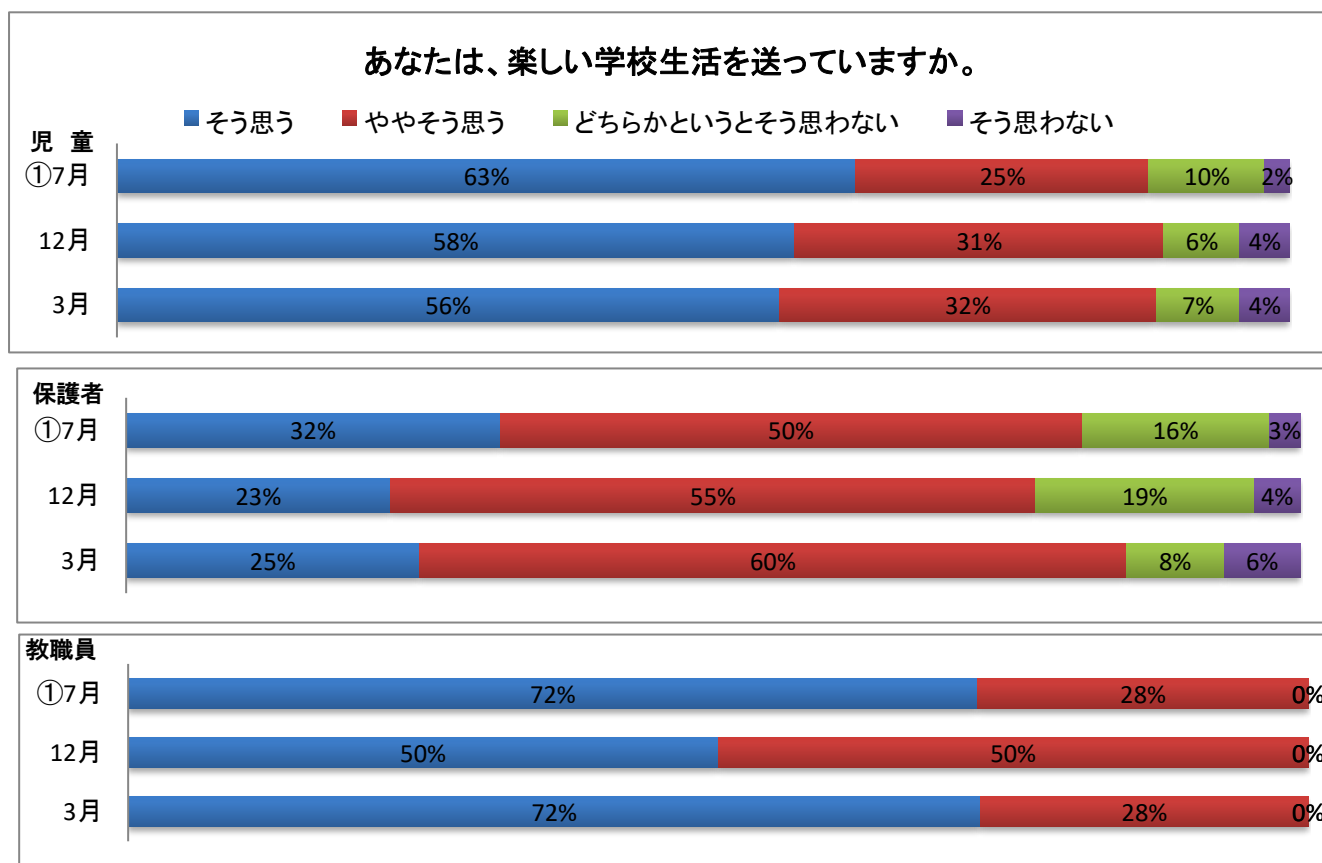
令和 6（2024）年度 3 学期「学校評価」アンケート結果について（総括）

学校評価は、子どもたちがよりよい教育を享受できるよう、その教育活動等の成果を検証し、学校運営の改善と発展を目指すための取組である。各学期末（7・12・3 月）に同様の内容で実施した。前回の結果と比較・検討するためにも同じ項目であることは有効であり、また、学校教育目標である「確かな学力」「豊かな人間性」「たくましい心身」が達成されたかどうかを検証する材料としても適切であると考えている。

各学期にアンケートを実施することで、学期ごとに比較分析するとともに振り返りをおこなうことができ、次の学期に向けての目標をたてることができた。

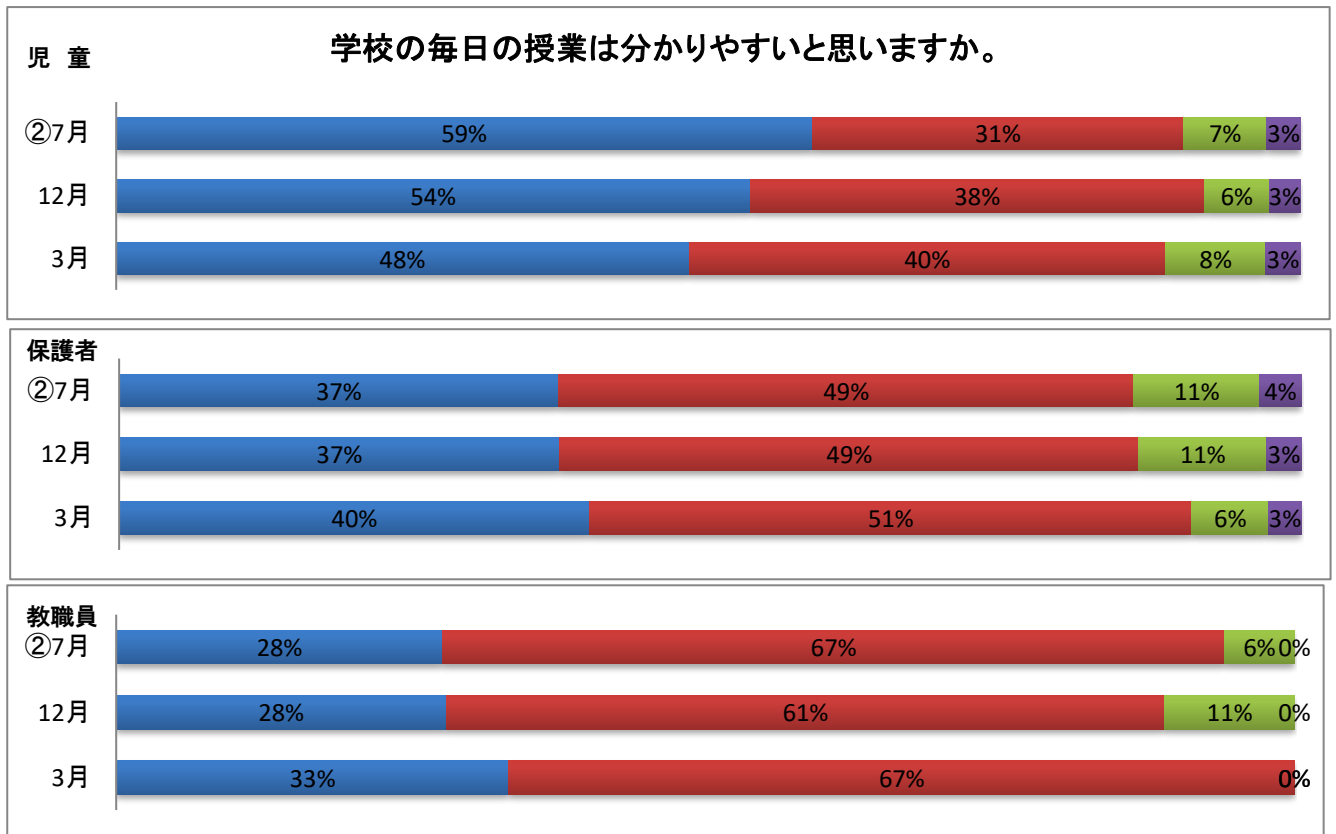
アンケートは、児童用、保護者用、教職員用、いずれも 4 件法で実施

【設問 1】 「いじめや暴力のない楽しい学級・学校づくり」について



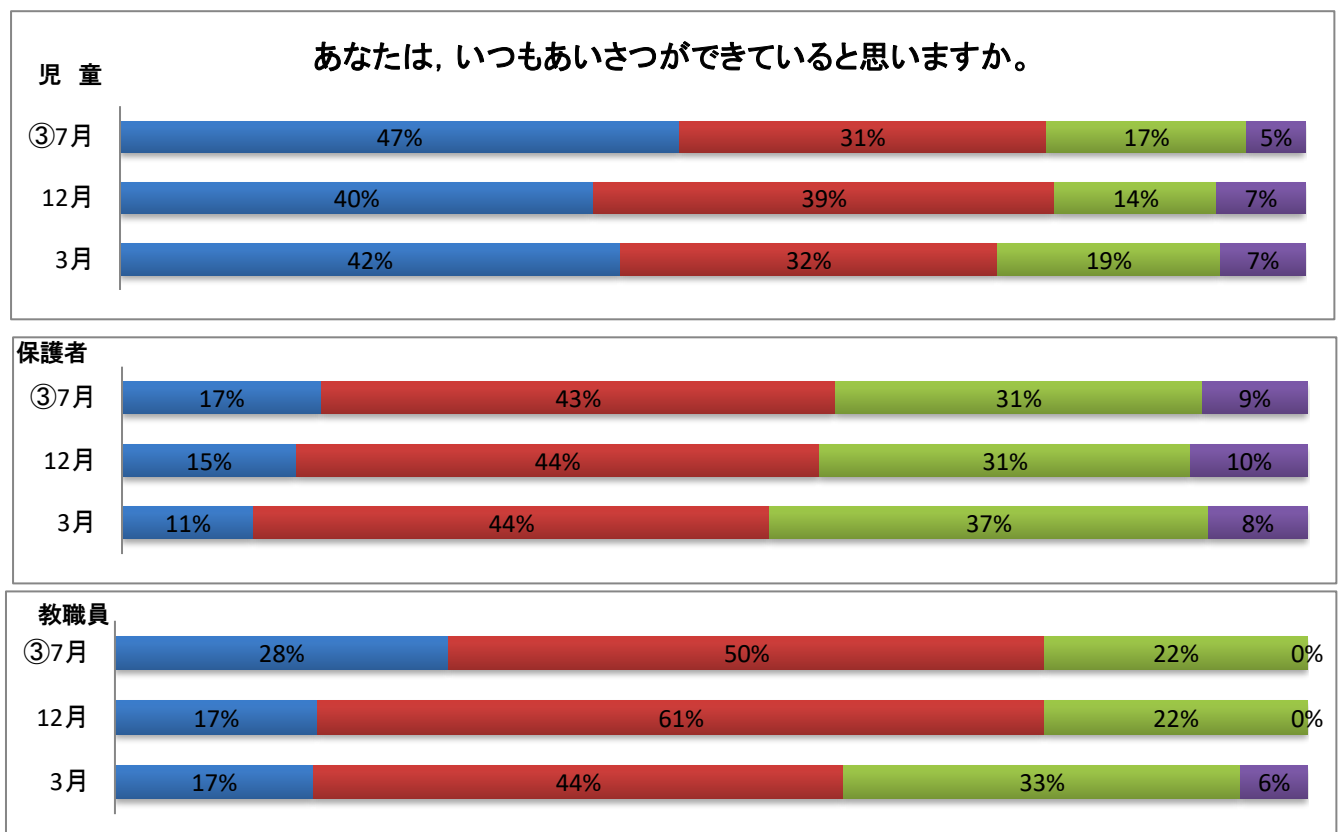
児童の肯定的な回答は、どの学期も 80% 後半であった。保護者の肯定的な回答は、2 学期は 70% 後半だったのが、3 学期になって 80% 後半となった。一方、教職員の肯定的な回答は、3 回とも 100% である。この設問に関しては、児童・保護者・教職員の「そう思う」の回答が 100% になることを目指していきたい。児童にとって、「楽しい学校生活」とは、勉強がわかる、学級・学校の仲間と安心してともに活動することができる、教職員との信頼関係を築くことができているなどではないだろうか。児童がそのような学校生活をおくることができるためには、やはり、教職員が児童一人一人と真摯に向き合い、内面に迫る指導をきめ細かに行うとともに、保護者とも連携をとりながら進めていく必要があると考える。日々の人権教育や道徳教育、生徒指導を積み重ねながら、教職員も児童も明るく穏やかな気持ちで過ごすことのできる学校にしていきたい。

【設問 2】 「授業のわかりやすさ」について



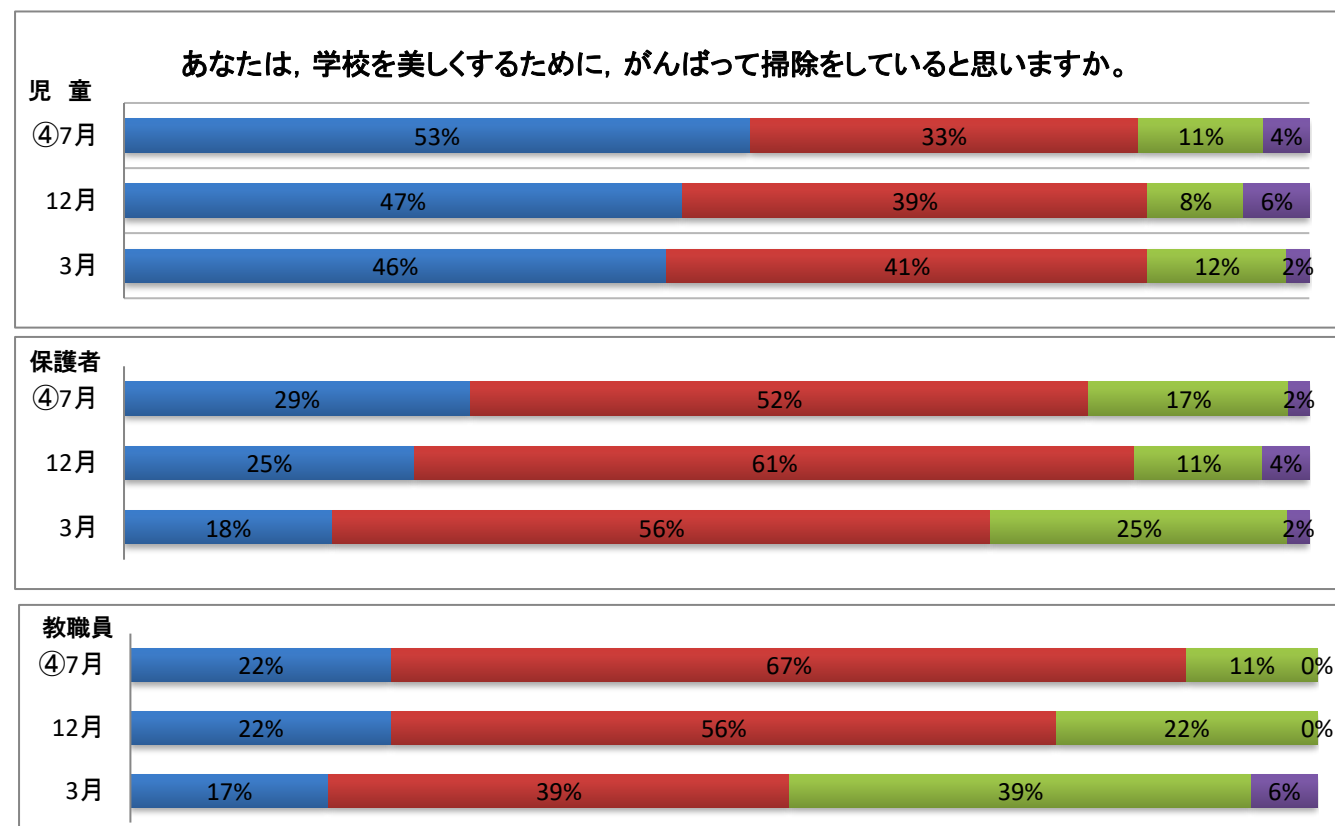
児童の肯定的な回答は、児童・保護者・教職員ともに85～90%となっている。教職員の児童の実態や興味に応じた教材研究と、デジタル教科書の導入や、支援員の配置が、児童一人一人に細やかなサポートとなっていると考えられる。今後も、ICTを効果的に活用しながら、基礎基本の定着を図るとともに、出前授業やゲストティーチャーも活発に活用しながら、児童の学ぶ楽しさや、意欲につなげていきたい。

【設問 3】 「あいさつ」について



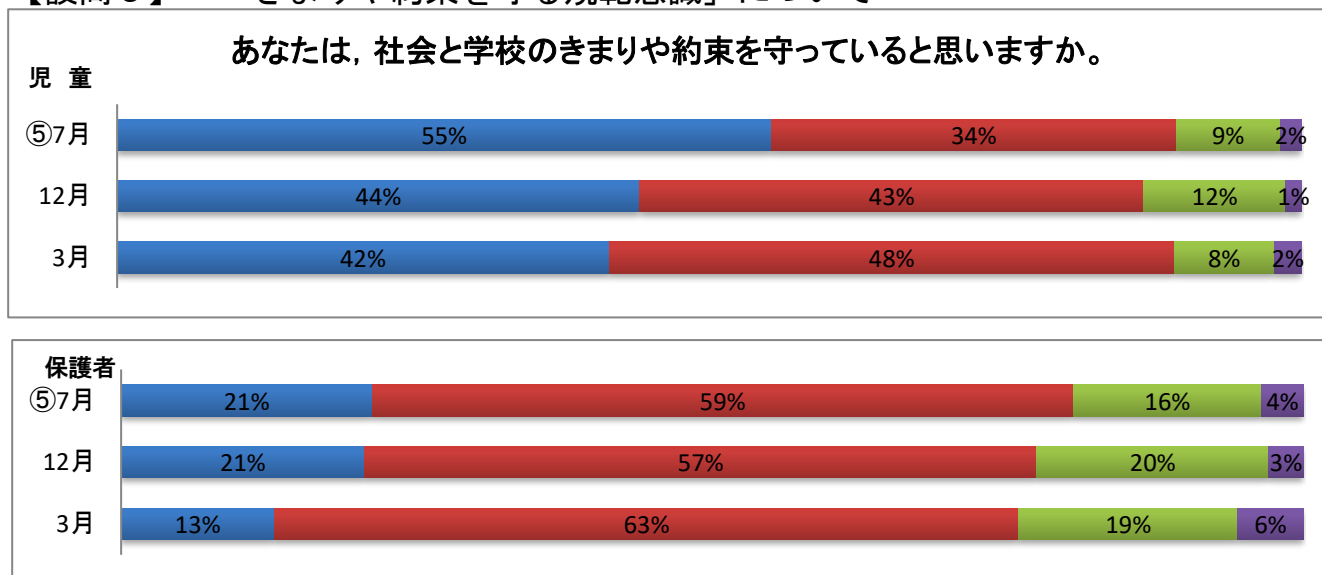
児童の肯定的な回答が3回とも70%台、保護者は50%台、教職員も60～70%となっている。「あいさつ」に関しては、肯定的な回答は低いと捉えており、昨年度と状況は変わっていないと考えられる。教職員や地域など、大人からの働きかけに加えて、委員会での挨拶運動など、児童からの「あいさつ」に対する発信も計画していきたい。

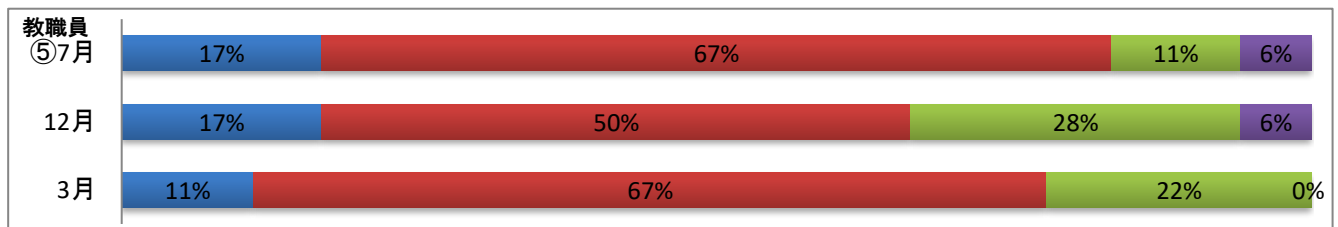
【設問4】 「校内の美化」について



児童の肯定的な回答はどの学期も85%以上なのに対して、教職員の3学期の肯定的な回答は56%と、1学期よりも30ポイント以上減少しており、児童との認識に違いが生じている。これは、児童の掃除場所の掃除の仕方の慣れや、掃除場所での人間関係の慣れが、教職員にとって、掃除時間いっぱい掃除をしていない、おしゃべりしながら掃除をしているととらえることとなっていると考えられる。たてわり活動での高学年には、良きリーダーとなり、グループをまとめていくという力が必要である。普段から高学年としての適切な言動について声をかけながら、掃除だけでなく、たてわりで活動する際に、教職員が具体的にどのような行動がリーダーシップにつながるのかということを伝えていく必要がある。

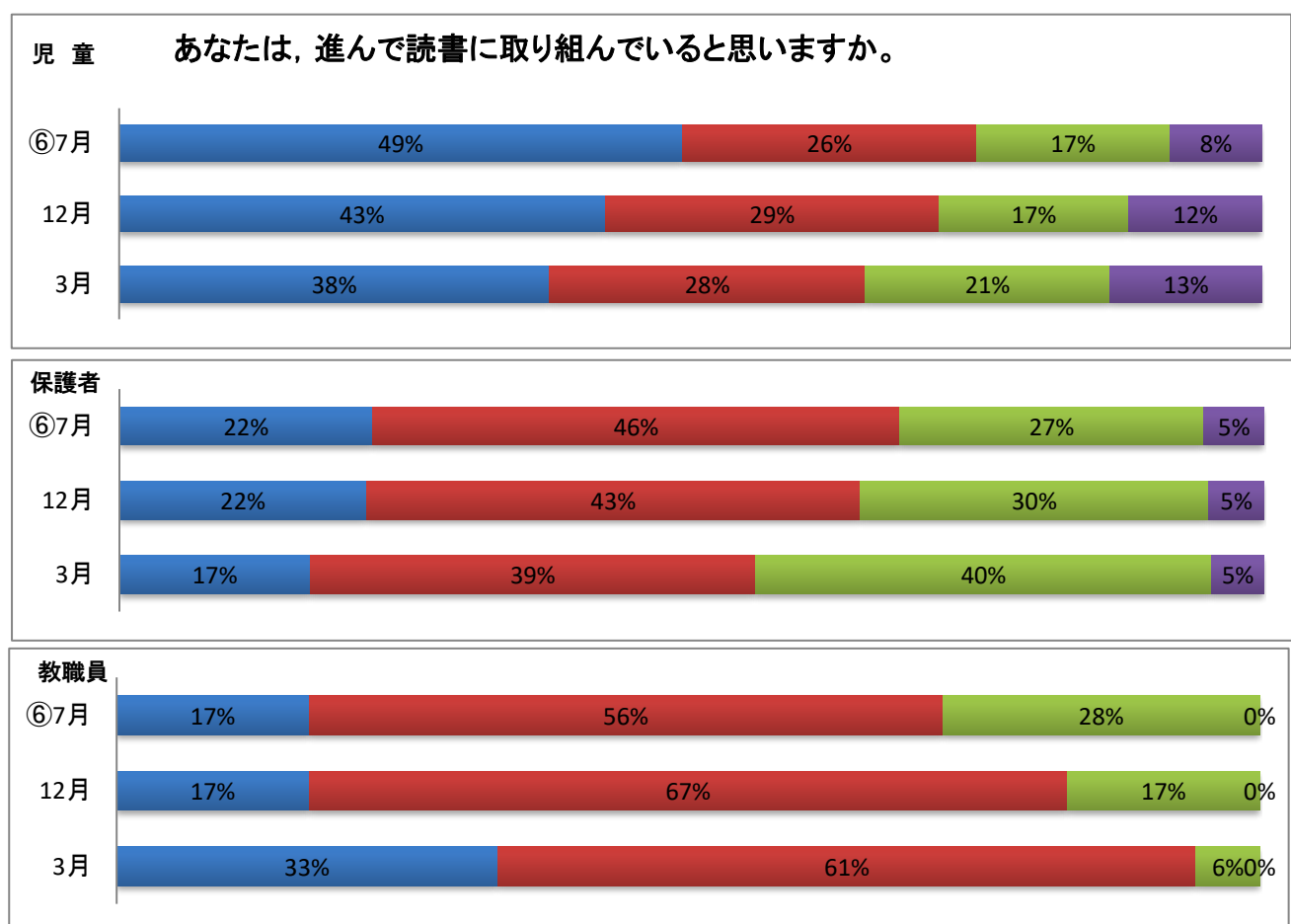
【設問5】 「きまりや約束を守る規範意識」について





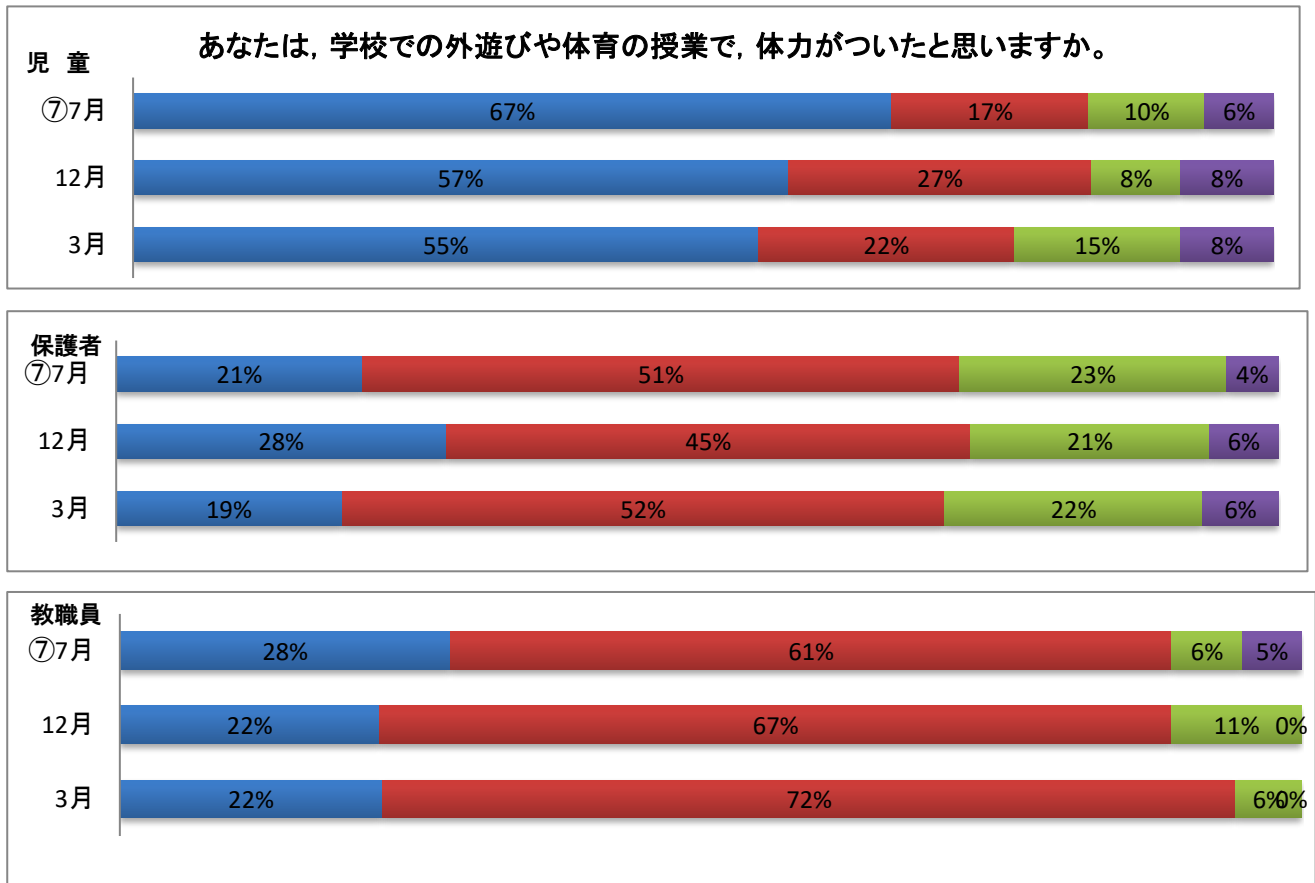
児童や保護者の肯定的な回答は、昨年度とあまり変わらない結果であったが、教職員の3学期の肯定的な回答は昨年度より10ポイント増加した。なぜこのきまりがあるのか、なぜそのきまりを守らなければならないのかという観点で、学校のきまりである「忍海っ子のくらし」を教職員で見直し、変更や削除を行った。また児童にも伝えるようにしてきた。昨年度に引き続き、児童の心にどの場面でも高い規範意識が育つよう、学校生活のみならず家庭・地域での生活においても実践できるよう、家庭と連携しながら心の育成に努めていきたい。

【設問6】 「自ら進んで読む読書」について



教職員の肯定的な回答が学期ごとに増加しているのに対して、児童・保護者ともに、減少している。昨年度に引き続き、児童の読書活動の向上につなげる取組を行っているが、児童や保護者にとっては、それが必ずしもつながっていないという結果となっている。タブレット端末の普及によって、読書離れが進むのは仕方ない面もある。しかし、教職員による読み聞かせなど、子どもの目線で児童の本への関心や意欲が増すような様々な手立てをおこない、本に親しみ楽しむことができるようにしていきたい。

【設問 7】 「遊びや授業を通じての体力強化」について



児童の肯定的な回答が2学期は84%だったのに対して、3学期は77%に減少している。2学期は、運動会や持久走大会、みんなでジャンプなど、いろいろな行事があり、運動が得意な児童もそうでない児童も学級の仲間と声を掛け合い、休み時間にも自ら練習する機会があったが、3学期は、そのような機会が減ったことも理由の一つと考えられる。今後は、運動が得意でない児童も、仲間とともに体を動かすことの楽しさを実感できるような取り組みを考えていきたい。